

「SMART」で授業改善

第36回時事通信社「教育奨励賞」推薦校の実践⑩

●熊本県御船町立御船中学校

熊本県中央部の御船町。県内屈指の醸造の商都として知られてきた町にある唯一の中学校が、町立御船中学校(作田潤一校長、生徒数450人)だ。2016年4月に熊本大地震が発生。町がある上益城郡は、甚大な被害を受けた。同校は、被災地の生徒の学力向上を目指し「SMART(スマート)」と呼ぶ五つのポイントを授業に導入。町内にある小学校とも連携し、授業改善に取り組んでいる。SMARTとは、シンプル(S)、目的・目標(M)、アクティブ(A)、練習(R)、確かめ(T)を組み合わせた略語で、作田校長が考案した。

作田校長は熊本大地震の発生時、上益城郡の教育事務所の指導課長として、御船中に関わっていたが、別の中学校校長を経て、20年春に同中に校長として赴任した。生徒の学力向上を図るためには、教員自身が授業改善のポイントを理解しやすくなる必要があると考え、これらを整理したが、SMARTだ(肩書等は取材時)。

教員用リーフレットを作製

県教育委員会は「すべての子供たちが『学ぶ意



グループで学習する生徒たち



味』を問いながら、『能動的に学び続ける力』を身に付けることを目指す」理念の下で「熊本学び」を進めている。御船中は、18、19の両年度「熊本の学び」の研究指定校になった。

この指定によって、まとめや振り返りの位置付けなどに学校全体で取り組み、以前と比べて生徒が「分かる」「できる」を実感できる授業が可能になった。しかし、一方で、学習の取り組み方や

解決方法が分からないと答えた生徒も多かった。聞き取り調査では、国語、社会、数学、理科、英語の5教科について「分からない」と答える生徒が多い傾向にあった。そこで、作

田校長は、生徒自らが単元のゴールや課題解決のために必要な手だてを講じ、自力解決や協働解決の場を通し、学びを確認しなければならぬと考えた。SMARTを一つずつ説明すると、
SⅡ学習内容を焦点化する。分かりやすい指示や説明・発問をする。
MⅡ単元のゴールの設定をする。何が分かればよいのか、何ができればよいのかを明確にして「目当て」を示す。
AⅡ児童生徒が活動する時間を確保する。教員がしゃべり過ぎない。
RⅡ定着を図る時間を確保したり、小テストを実施したりする。
TⅡ共通のノートである板書を基に、学習のまとめをする、児童生徒が学びを振り返る「問い」をする。

これら五つのポイントを実践に移すため、教員用のリーフレット「御船版『熊本の学び』SMARTな授業実践」を作製した。リーフレットには、五つのポイントの簡単な説明、標語に加え、より具体的な指導方法、実施前と実施後の具体的な比較例(ビフォー、アフター)を示している。

例えば、Rの項では、標語は「わかった」や「できた」と感じる時間を確保しよう!。実施前・後の比較例では、「学級全体で問題を解決し、授業(単元)のまとめをして終わる」「単元テストや定期テストだ

けで、定着状況を評価する(ビフォー)。

↓「授業(単元)の中で、学んだ知識や技能を一人一人が活用する時間を設ける」「授業の中で、小テストをしたり、応用問題や生活場面で活用する問題に挑戦する機会をつくる(アフター)。」

また、具体的な指導法を明示している。

①「『めあて』の達成状況を45(50)分の中で評価し、実態に応じた練習等を行う」

②「知識・技能をドリル型の練習で習得させることと併せて、身に付けた知識・技能を表現したり、活用したりする機会を設けることで定着がさらに図れる」

R以外の標語を見ると、
Sは「本時の目標を達成するために『教えること』と『考えさせること』を整理して、活動の時間確保をしよう!」(学習内容の焦点化)

「指示や説明等を、明瞭な声で、短い言葉で、言い換えをしない!」(同時に複数の指示や発問をしないことを原則に、長い説明等は一文を短く区切る) 指示や説明・発問は、できるだけ板書(イラスト等で示す)しよう!」(簡潔で視覚で捉えやすい指示や説明・発問)

Mは「『めあて』は目に見える活動の表記にして、児童生徒と目指す姿を共有しよう!」(本時に「〇〇ができる・わかる」が明確な『めあて』の提示)。

Aは、「見通しをもった『自力解決』にしよう! 必要性・手段を明確にした『協働解決』にしよう!」(全員の「やってみよう」なるほど)

が生まれる『自力解決』と対話的で深い学びが生まれる『協働解決』の場の設定

Tは「『問い方』を工夫して、『まとめ』『振り返り』をしよう!」(何を学んだかを明らかにする『まとめ』と、自分の学びを振り返る『振り返り』の実施)。

また、全国学力・学習状況調査結果などの分析を基に、目指す生徒の姿や各教科で目指す資質・能力を設定。生徒と教員が同じゴールを共有し、毎時間の授業に取り組み、生徒の学習の主体性の向上を図った。

さらに、授業公開週間をつくり、全教職員で授業の展開モデルを共有した。単元指導計画や単元のゴールの生徒の姿を明記した学習構想案を作成して授業に取り組み、相互に高め合った。このように、教科の枠を超えて学校一体となって実践したことで高い教育効果が得られたという。

単元オリエンテーションを重視し、この単元でどのような学習を行い、どのような見方や考え方をうい、どのような過程でどのようなゴールを目指すのかを、生徒と共に考えるようにした。設定したゴールを毎時間黒板に提示したり、振り返りの時間を設けたりもした。

授業「分かる」がアップ

SMARTの導入の結果、20年度の県の学力・学習状況調査の国語、数学、英語について、19年度と比べ平均正答率が5%以上上昇。多くの教科で1時間の授業ごとに「できた」「分かった」「た

めになった」と感じている生徒の割合も増加した。作田校長は「実践していることは、基本中の基本。昔からやってきたことで、新しいことは何もない」と指摘。SMARTについては「蓄積した指導方法を新しい教員に伝えたかった。改善ポイントに対する共通理解が大事で、教員に定着してもらうためにも、分かりやすく、覚えやすいネーミングが必要だった」と振り返る。

SMARTの授業実践の研究を町内にある小学校長に紹介したところ、「分かりやすい」「効果的だ」との声が上がり、町内の小学校6校にも拡大。小中連携の取り組みが始まった。「熊本の学び」のリーフレットについては、小中学校の研究主任と教務主任が参加した部会で、小中学校の教員にも分かりやすい表現に修正された。小中連携では、研究推進会議や各部会(授業づくり部会、学習習慣づくり部会、生活習慣づくり部会)、町教職員全員研修を定期的に開催。小中連携の成果指標(13項目)を設定し、アンケートを実施した。部会や児童生徒の回答状況から成果が表れている学校の取り組みを紹介し、各校で実践している。

SMARTの授業づくりの意識が進んだことで、生徒主体の授業が多く見られるようになった。授業参観時は保護者に対し、SMARTの項目に沿った評価アンケートを継続的に実施。同校の授業づくりへの理解が高まり、特に、授業で「目的・目標」を持たせることの大切さが、保護者にも浸透しているという。

(羽田菜美亜Ⅱ千葉支局、前熊本支局)